青山同窓会会報

発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原二
新潟高校内
発行人　斎藤希式
印刷所　第一印刷所

新春を迎えて

会長　鍵冨清一郎

新年お目出度う御座います。

昨年は十一月四日東京青山同窓会が、東京新橋亭で開かれたので石川、阿部、丸亀の新旧三校長に渡辺市長斎藤希式さんと出席しましたが、盛会で先輩にも若い方にもお会いして、なつかしく昔の思い出に一夜を愉快にすごさせて頂きました。今年は同窓会もだんだん盛んになりますので、七月一日の総会一月二十一日頃の新年会の他に秋晴の日にも会合をやりたいと思いますが、皆様如何ですか。

寒さの折柄身体に気をつけましょう。

新年おめでとうございます

学校長　丸亀金作

昭和四十一年の年頭にあたり、心を新にして前進したいと思います。

昨年は、新潟地震に生じた災害復旧にあれこれしている間に、過ぎ去ってしまいました。みなさまのお陰で二階建の体育館は、美事にでき上りました。正課の体育の授業は、いうまでもありませんが一階には、柔道・レスリング・卓球・フェンシング・剣道・唐手のクラブ活動が同時にやれますし、二階には、体操・バスケットボール・バドミントン等のクラブ活動ができるので、まことに便利になりました。また、信濃川河畔にボート部の艇庫を新調しました。この外、唯一の旧校舎であった旧体育館は、通信制課程の宿に改造いたしました。

こうして新しい年を迎えることができましたことを深く感謝しています。そうして更に本校の向上発表を期したいものと念じています。

『青陵』は断乎護持しなければならない

幹事長　斎藤希式

青陵問題が起きてから、既に一年を経過した。

その間あらゆる手を尽したが先方は頑んとして話し合いを拒否したまま、解決はおろか、その可能性さえも、ただ先方の出方のみに希望を託すような既ッぴり腰では、殆どうすれてしまつたと断じる以外にない。

この問題に苦脳する生徒たちも、解決を引き受けたわれわれを信用して、隠忍自重よく我慢してくれたが、今はもう、それも限界点へ来ているぞといいたいところだろう。

われわれの責任を痛感する。

名分を尚び伝統を愛する精神の理解にこそ、お互い古い建学の学校同志を結ぶ共通の鍵があると信じ、話し合えば必らず解つて貰えると思つていたところに、此方のお人よしさがあったのだ。

煮ても焼いても食えぬ相手であることを、われわれは知らな過ぎたらしい。

剛直一徹の青陵男児が、いささか折り目を正し過ぎた紳士振りを、しかと反省する必要があろう。

先方の本間校長は「青陵という新校名は、教育環境と建学の理想とを象徴して名づけたものである」というが、そういう立派な口上から、どうして他校の大切な名称を無断借用して、しかも平然と自ら誇るような発想と感覚が生れてくるのか、実に不思議なことだ。

誰からも文句のつけられない立派な校名を選定してこそ、新学園の発足にふさわしい意義を持ち、しかもその独創性の故に、真のプライドも愛校心も、おのづからに湧き高まるものではないのか。

それを、「青陵という新校名に対して、生徒の心の中に既にほのぼのとした愛校心が湧きつつある」ではきく方で恥づかしい。

この言葉は、果して同校の生徒たちの心情を誤りなく伝えているだろうか。むしろ、大部分の生徒が、内心人からの借り物に肩身の狭い思いだろう。それが心優しい女の子たちの真情であるまいか。

それを命名後僅か二、三ケ月にして（昨年三月の発言）他校の名の下に愛校心が湧いて来たなど白々しい高言をする前に、その心なき仕打ちで、五十年その名を誇つて来た本校の生徒の心が、どんなに深く傷つけられ、どんなに広く、災いされているかを、ひそかに思いやる、そういう人間としてのあたたかさえ、本当に一度も彼の心の底に点らなかったのだろうか。

あわれにして不可解なりである。

そもそもこの問題の本質は、自由だの権利だのと殊更言揚げすればするほど、逆に語るに落ちた破目を示すところに、厳として真実が潜んでいる。心を曲げずに道義と良識とを以って判断するならば、昭々明白に理否を悟らざるを得ないであろう。

これが一般社会の商売の世界なら、団子屋だって一杯屋だって（例えて恐縮）、隣りに無断で自分と同じ看板を掲げられたら、エヘラエヘラはしていないだろう。四の五のとなったら、怒らぬじり鉢巻に天びん棒というところだ。

いわんやわが青陵精神には、ルール破りに泣き寝入りする卑屈さは、一滴もない。

相手は、既に問答無用の構えである。

しからば、われはわれの道を行かんのみ。

青陵！われわれの旗を、高く掲げようではないか。

青陵！われわれの歌を、高らかに唱うではないか。

東京青山同窓会 総会記

三〇回　湊元克己

東京青山同窓会は、会則があるわけではないが、年に一回総会（みんなで集る会）を開いてきました。開らけなかった年もありますが、その際、できれば本部から会長、母校校長先生その他有志の方々に御出席をお願いしていました。校長がかわられた時は、たとへば「磯・石川」「石川・阿部」先生の場合の如く、新旧校長先生に御出席いただき御挨拶を頂戴しました。それで一昨年は、阿部校長先生が退職され、丸亀先生を迎えることになったので、東京青山同窓会も、会長の他両先生を迎えて開く予定でありました。

大体東京青山同窓会は、例年五六月頃ひらくことにしていたが、この年新潟国体にひきつづき、新潟の歴史はじまって以来の天災が起って、それにつられたわけではないが、とうとう東京青山同窓会もお流れとしたわけです。

新潟に天災でもあれば、かへって郷土への関心や愛郷心が高まり同窓会など開くべき筈であるが、全くもって世話人の怠慢と恥じ入る次第です。

ところで昨年も春夏の交は開らく機会を失し、夏もすぎ秋も深まった十一月四日、左記の通り開催しました。

時　昭和四十一年十一月四日午後五時

所　新橋駅前　新橋亭

出席者

来賓　本部会長　鍵冨清一郎

〃　母校校長　丸亀金作

〃　前校長　阿部藤策

〃　前々校長　石川健四郎

〃　新潟市長　渡辺浩太郎

〃　本部幹事長　斎藤希式

○第7回　山内保次

○第9回　青木得三

○第18回　木村次郎

○第19回　鍵冨清一郎　今川一策

○第21回　金子義晁　千野容雍

○第22回　山口吉次郎　神林力三

○第23回　近藤順二　西山辰蔵

○第26回　木村耐七　星野晃広

○第27回　古山利雄　小林栄太郎

○第28回　早山洪一郎　渡辺憲一郎

○第29回　阿部藤策　松井達夫　市村三男三　石崎重郎　五十嵐県一

○第30回　中居直二　岩瀬冨士雄　片桐義礼　西山義雄　木村逸郎　山添直　鷲田徳雄　渡辺浩太郎　湊元克己

○第31回　本多深応　山下大蔵

○第32回　前川軍治　鎗居恒夫　曽我英彦　山田輝親　常山四郎　塚野忠三　笠原直三　味方正造

○第33回　斎藤希式　若林清　安部洋一

○第34回　笹川盛吉　長浜浪治　片桐顕智　水戸真吾　樋口政忠　山崎重三郎

○第35回　石山省三　入沢健三　上原悌三　松木勲

○第36回　渡辺徹　青山勇三

○第37回　村山三福

○第38回　河上由男　神田利武

○第39回　小林清市郎　前田真正　若松栄一　渡辺俊男　宇佐美平八郎　栄森泰雄　関種吉　鈴木秀夫

○第40回　阿部俊二　相田博　会田俊雄　石田正典　河内泰三　小山賢市　渋川七夫　田中良郎　高田信　野沢剛造　星名三治　堀川秀夫

○第42回　丸山平次

○第43回　佐藤彰平

○第45回　鈴木繁夫

○第48回　中野慶治

○第53回　三条昭典

○第58回　福田清

○第66回　高橋守　村上紀光　真貝政孝　富岡隆一

その他前月二十五日結婚された渡辺市長令嬢公子新郎惇夫、市長夫人が特別出席され錦上花を添えていただきました。

尚出席会員全部に、結婚記念品ウエデング・ケーキ、祝酒を頂戴し、同窓会と同時に市長家結婚披露祝賀会ともなり一同上機嫌で散会しました。

40年度 総会の報告

日時　七月二日午後五時

場所　母校会議室

出席　約百名

次第

一、開会

二、会長挨拶

青陵問題の現況

体育館の復興

三、校長挨拶

学校復興についての感謝

地震復旧状況

学校の現況

四、報告

(1)会務会計　プリント発表で承認を得る。

(2)東京青山同窓会報告

湊元氏より現況報告、三遊亭円歌氏、源川栄二氏、師尾源蔵氏等の思い出話あり。

(3)青陵問題……斎藤希式氏、田中前P・T・A会長、君P・T・A会長。

五、議事　会費徴収の件

斎藤幹事長より提案理由説明、一口年額五百円に決定

六、参議院議員出馬佐藤芳男氏挨拶

七、閉会　五時五〇分

懇親会

総会後第二体育館で懇親会が開かれ、出席者二七二名例年より盛会のうちに午後八時終了、各同期毎に第二次会へと流れて行った。

出席良好でビールの賞品を授与されたのは次の各期であった。

一位　五六（七）回

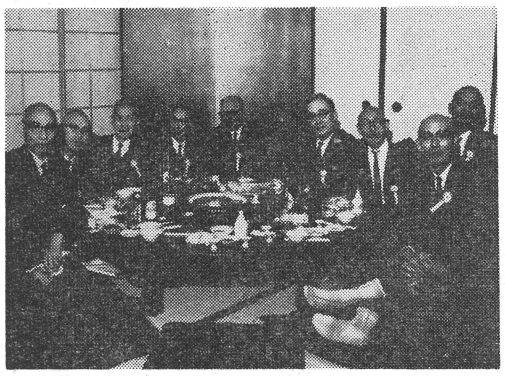
二位　四〇回、四八回

三位　六〇回、六二回

四位　五四（五）回

先輩諸氏から三九、〇〇〇円とビール十打の寄贈があつて、青陵健児の意気大いに揚つた。

新潟から参加した顔触れは？



山内会長を中心に並ぶ長老たち

通信制から

新潟高校に通信制があることを余りご存知ない方もありますので通信制の状況を紹介します。

終戦直後、新潟中学校が新制の新潟高校に改組されて間もない昭和二十二年教育の機会均等の精神にもとづいて、新潟県では、新潟高校と高田高校に通信教育部が併設され、国語、数学など五科目が開講され、県下各地から約三百人の向学の青年が集つてきました。

しかし新潟は、戦後の混乱期に遇い、印刷用紙も入手がむつかしく専任教員も居らない状況で、学習は容易ではありませんでした。

しかし発足後十二年、昭和三十四年に初めて二名の卒業生を出すに至りました。なにせ、交通不便な僻地や昼間労働に従事しながら学習をつづけることは容易ではありません。全日制の学校と同じ科目、同じ内容のものを自宅で勉強し、休日には本校や協力校のスクーリングを受けにやってきます。まさに、二宮金次郎の現代版といったところです。

昭和三十六年十月にようやく通信教育の実績が認められ、通信制として全日制や定時制とならぶ高校教育三本の柱となりました。現在では専任職員二十名、生徒数一八〇〇人を数えるに至り、施設設備も大巾に必要となり、昨年は通信制の宿泊施設も出来上りました。この施設は、旧新潟中学校時代の東体育館を補修したもので、モダン校舎の中にとり残された、唯一の史蹟記念物といわれていたものであります。

昭和三十六年、青山同窓会に通信教育部が設けられ、爾来、五人十人、十五人と卒業生も増し、只今五十五人の同窓生が社会で活躍しています。今年の三月には、二十数名の卒業生を送ることになります。卒業生の中には、新潟大学から東京大学の大学院に学んでいる人もおりますし、大学の通信教育を、受講中の者が十一人、すでに三人が大学卒業の資格を獲得して居ります。

これからは、社会の要諸もあり僻地や後進性の強い県内各地の勤労青少年に、学ぶことの喜びと尊さを一人でも多く感得させ、もっと多数の卒業生を送り出すようにつとめております。

通信制の校舎もいずれ建設されるのではないかと思いますが、今後とも同窓生皆さんのご協力とご支援の程をお願いいたします。

通信制主事（新中四十回卒業生）
阿部芳男

営業種目　一般上水道・簡易水道・衛生　暖冷房・空調・瓦斯・其の他
新潟市入船町3丁目3702
新潟工業株式會社
取締役社長　小島松一　(40回卒)
本社　電話(22)6884番・3489番
佐渡出張所　両津市春日町　電話(両津)2766番
上越出張所　新井市田町第4　電話(新井)3376番

難航する青陵校名問題

一、進捗しない七月以降の歩み

七・三　新潟高校生徒会々報発行

藤田生徒会長は会報のトップに今あれこれ思い浮べて第一番に脳裡に閃くのはなんと言っても〝青陵問題〟である。僕達の安易な見通しに反して、話合いが進展せず関係者の所へ分担して何回もお願いに行ったものだ。総会等をやり意志の統一を計りながら、結局は二月末街頭に出て署名運動ビラ配りすることにまで盛り上った。その頃になると二校間の教育的立場の問題から、社会的問題にまで発展して、日報紙上等にこの問題に関しての報道、論評、投書等が多く掲載されるようになっていた。そして僕達に有利であるように思われた。しかし何等かの迂余曲折があったにしろ、工芸側の拒否の態度はかわらず、現在に至ったことは遺憾至極であり、深く責任を感ずる。……この問題を通じていつも悩み考えていたことは高校としての生徒会活動の限界だった。完全なる自治団体でない私達の組織が、外部団体や社会と直接に関係をもったり積極的に働きかけたりすることに対してどのように位置づけをしたらよいか。正当なのか不当なのか、問題が余りにも大きくなったためかあるいはその渦中に密着しすぎていたため、冷静に判断を下すことができなかった。何はともあれ私達青陵健児の工芸側に変更を要求する態度は終始一貫しているのである」……と

七・二〇　「青山」第九一号発行

守りぬこう我等の〝青陵〟をと石塚新生徒会長は青陵祭につちかわれた団結をもとに生徒会を運営する。また青陵の伝統を受け継ぎ新しい青陵の伝統を築いていく。青陵校名問題については青陵祭に見せた団結と自信をもとに伝統青陵を愛し、さらに我々の青陵を確立する。青陵はあくまでも譲らない。

一一・一　「青山」第九二号発行

特集　青陵問題―絶対に渡したくない。なお強い青陵への愛着―を発行する。

青陵問題が起こって一年。しかしまだ解決のめどすら立っていない。現状としては県知事の斡旋に期待しているものの、県知事選挙などでいそがしくほとんど動いていない。そこで過去一年間の青陵問題をふりかえり、現在生徒がどのように思っているのか、工芸高校がこの問題でどう主張し本校がそれに対しどう答えどう主張しているのか、第三者はどうみているのか、今までの生徒の運動は、先輩はどう考えているのか、この問題をあらゆる角度からみて、一面を使う特集を行なった。現在の生徒の気持を、全校生徒約半数にあたる七百名にアンケートをとってつかんだ。

このアンケートが訴えることは現状として我々の力ではどうすることもできないが、なお強く青陵に愛着と誇りを持ち、ぜひとりかえしたいということだ。「青陵」は本校の伝統の象徴であり、心の支えであることが、このアンケートからも、先輩の寄稿して下さった文章からもわかる。今までの運動については、少し過激に走り、いさみ足をした所もあったが、全体的には、高校生として理性をはたらかせ賢明なものであり、我々の全力がつくされたといえよう。また、この問題がここまでこじれた原因に、両校の「青陵問題」に対する考え方のちがいがあることがわかった。文章の交換だけでなく当事者同志が話し合ったなら、すぐにも解決するのではないかと思う。しかし工芸高校がそれを拒否しているのでは、どうにもならぬ。

またこの特集のなかで同窓会幹事長斎藤希弐氏は、次のように述べられた。

「青陵問題は生きている、解決される時が来るまで、生き続けている。我々一人一人が、絶対に解決しようとする決意を捨てぬ限り生き続けている。

我々の態度は、コマの心棒のように真っ直ぐに立っている。我々が、今、静かに解決の時を待っているのは、『全責任を持って必ず解決する』と会長に約束した知事の言葉を信頼したいからだ。

知事の言葉には、解決の時機は別に含まれていないが相手のある以上任方のないことだし、こちらで注文をつける筋合いでないが、期限なしでいつまでも放任されていても構わないという性質のものでない。知事としても、もちろん時機ということに一応のメドを置いていることは充分に察知できることである。

生徒諸君は、ながい間、問題の経過について報告を聞かされておらないので――事実は報告しなければならないような進展が何もなかった為であるが――問題の成り行きに対して、かなりの不安と疑惑を抱かえざるを得ない心境に陥っていることと思うが、それがずるずると一種の敗北感につながらないように、大いに自戒してほしい。

自らを恃み、おのずから期するもののある心を堅持して、今は静かにその時を待とうではないか」と。

一一、二四青陵問題校内対策委員会

青陵文化時報（昭和24年発行）

知事選挙後の対策を打出す。
1 全体対策委員会を開く。
2 同窓会長の意見を聞く。
3 知事に問題解決を依頼する。
4 今年度中に解決の見通しをつける。
5 最終的には裁判に持っていくかを考究する。

一一、二六　ロングホームルームで青陵問題で話しあう。

その一部を拾ってみると、

a組

現在の青陵問題の続行の是非

○青陵高校（工芸）と長く呼ばれていると、青陵はなくなってしまう。だから積極的に行くべきだ。

○先生方や生徒は青陵問題について関心を持っているのは十分の一位だと思っているようだが、しかし、この組では（一年生）全部が意見をもっているのでそういう考えはやめてほしい。

○今は新潟高校の危機である。皆で考えよう。

b組

○知事に一任すべきではない。

○積極的対策をとるべきだ。

例　生徒同志の話しあい、ビラ配り、署名運動等。

○現段階では知事にまかせ、自分達の足元を見つめ直せ。

○署名運動等工芸側を刺激するようなことはすべきでない。

c組

○今後活溌にやるべきだ

○工芸高生を見ると変に見てしまう。

d組

○今までの生徒会の態度があやふやで、その為もり上りがなくなってきている。

○春から知事にまかせてきたが、今まで実際に何の行動もしていない。

生徒会はそのブランクの間何もやっていないが、今後は任せ放しではなく、内部からもその運動を進めていくべきだ。

○今となってはもう改名の見込みも薄いし、それを望むことは少し無理ではないか。

○人任せでなく民主主義の話し合いという基本にもどついて相手方と会談する努力を怠ることなかれ。……

一二、九　青陵問題対策委員会

協議事項は次の通りであった。

○裁判問題として受理される可能性は少ない。

○鍵冨同窓会長、等々力委員、工芸側理事と懇談することを軌道にのせるべく努力する。

○君PTA会長が本間校長と懇談解決の糸口を見つける。

○青陵問題対策委員会、全体会議を開催今後の対策を考える。

○公開の席上で話し合う必要があるのではないか。

二、壁が破れるか頂上会談

以上の如く知事選等によって青陵校名問題は一時中断され、何等進展を見せていないようであるがこれについて鍵冨会長は次のように云っている。

「この問題はまかせてもらいたいと言ったが、生徒が一生懸命に考えているのをほったらかしているわけではない。知事も体が悪くなってのびのびになっている。善意でやっている。一生懸命にやっているのを知らないで、無関心であるとか、熱意がないとかいう見方が相当ふえているように感ずるが、変な気持になる。知事の体の調子を見て皆が納得のいけるようにしたい。

相手のあることで猛烈に気勢をあげても、のっかかってこなければならないのでむずかしいが、一つの結論を見つけたいと思っている。青陵の名も青陵祭も相手はどうであろうと四十年も先輩がきづいたみちであり、誇りをもって続けようではないか」と会長自ら解決への熱意を示している。

君PTA会長も繁忙の中「交渉が決裂するとか、すぐきまるとかいうことではないが、一度会って話してみたい。格式ばらないで…」と語っている。その他の委員も全部円満なる解決を熟望している。

もしこれが解決されないで、自然消滅のようになったら生徒はどう考えるか。「大人にまかしたが何等解決できないではないか」という不信感を持つことになる。

本校では本問題が表面化すると同時に円満なる解決を図るべく「青陵問題対策委員会」が結成されこの問題に当ってきた。

学校側としても丸亀校長は昨年三月初め、次のような書面を本間校長に送っている。

拝啓

このたび御校は短大を創設して併置されるに当り、学院名を青陵高校名を青陵高校と改称されるようでございますが、本校側としては、この青陵を過去数十年に亘り子弟教育のために用いており、現在も用いています。従って同窓生在校生、本校教職員はこれを教育のよき伝統として受継いでそれを育てて来ています。それが隣り合せの学校で用いられることになりますと子弟の教育上にさしさわりが生じて来ます。そこで御校に御考慮をお願いし他のよき名称に変えて頂きたいことを要望して来ました。

然るところ去る二月二十五日御校からの御回答に接しましたが、それは青陵を改める余地はないということでした。私共が教育上問題があるので考慮して頂きたいという要望の御回答としては、到底納得できないのであります。切に再考して頂きたいことをお願いいたします。

以上本校の回答を申上げるとともに再び要望いたします」

と、これに対して三月十八日付の本間校長からの返書は

「拝啓　愈々御清栄の御事とお慶び申し上げます。

さて去る四日の御返書を拝読、その後先生に親しくお会い致しお考えのむきを諒しましたので可及的に早くPTA、同窓生にこのことを図り、更に学校法人の理事評議員会にも慎重を期し時間をかけて協議いたしました。併し皆さんの考えは一様に、この新学院名こそは本校の教育環境と建学の理想とを象徴して名づけたもので、素朴な素直な感情からである。面も現在では生徒の心の中に既にほのぼのとした愛校心のわきつつある折から御許しを得たいと言うことに決まりました。誠に先生の御意に添えなく申訳ありませんが事情御賢察の上御了承頂き度く切にお願い申しあげます」との返答であった。その後関係者との直接的話しあいの道は断たれ膠着状態になったまま、今日に至っている。

われらは青年を常に鼓舞していかなければならない立場にある。大人は、青年の自負と軒昂な意気が失われ、屈辱感に満ちた世界に追いやることは到底出来ないのである。道理を立て、自分は日本を背負って立つのだという大きな誇りと意気を常に持たせてやりたいものである。

今回　はからずも隣接校に「青陵」名が用いられることにより混乱が起ることを恐れていたのであるが現に工芸側では「青陵」名を校名以外にも用いるようになり、本校の行事と間違われたりして困惑を来している。

わが校の伝統の中に生き続けてきている「青陵」名が隣接校で用いられることは本校生としては見るに忍びず、大人の世界にまかしたといっても機会ある毎に活溌な意見を斗わし、どうしても譲れないとこの問題に真剣にとっくんでいるのである。

今や同窓会、PTA、学校生徒共に不幸な結果にならないよう不満も爆発させずに隠忍自重してきている。

この問題は一に公立対私学との対立感情からの問題でないことは冷静に考えれば当然なことで、こんな所から一方的に主張しているのではない。

また星霜移り、人は去り日時が経過し、既成事実が積み重ねられれば自然消滅して忘却の彼方に捨て去られるというものではない。本校の校歌があり応援歌があり、学校がある限り永遠に生き続けるであろう。

本問題の本質は経済上の利害関係から出ているのでもなければ、エリート意識から出ているのでも決してない。わが校に従来も現在でも使用している魂ともいうべき青陵名をすぐ隣の学校が使用したことから起ってきているのである。

同じ教育の道に邁進しなければならない立場にあるものとして大いに疑念を持たざるを得ない。本問題は教育上の問題であり、道義上の問題である。こういう意味から飽くまでも強く訴えたい。

幸い近くトップ会談が開かれ両者の接触の機会がつくられると聞くが、これによって一歩大きく前進するのではないかと期待されている。

こじれにこじれた両者の気持が融和し、同じ教育の道に進む者の連帯感を強めることを、全同窓、学校、PTAあげてそれを熱願する。そして本問題の円満な解決が一日も早く到来することを願っている。

一二、二一　青陵問題対策委員会

○青陵校名問題は飽く迄変更してもらうことを再確認する。

○知事は静養中であるので、君PTA会長が努力してみる。

○第一回正式会談をもつ

（三団体一体となってこの問題の解決に当る）

整形外科
猫山宮尾病院
院長　宮尾益一郎
（二二回卒）
新潟市西大畑六〇一
電話(22)八一八〇・六二二六

会株社式
北村製作所
取締役社長　北村治作
（三四回卒）
常務取締役　田巻義彦
（四〇回卒）
新潟市出来島四〇一番地
電話　代表(44)九一三一

三遊亭円歌師匠の思い出

一六回　倉島正平

三遊亭円歌

追想すれば早くも六十年は過ぎた。明治三十八、九年頃吾々が十五六才頃の少年時代である。当時私は北海道の片田舎から新潟中学に来た田舎者であり田中利助君（三遊円歌師匠の本名）は新潟古七の花柳界に産湯をつかっておんば日傘で、育った吾々はトーフとあだ名して居ったな粋少年であった。当時私との交遊もなかったのは自ら明である。三年の頃田中君は他へ転校されて以来全く消息不明であった。それが昭和十四年十一月十一日新潟NHKの開局一週年記念演芸会に京都一流の落語家三遊亭円歌師が来る事になった其頃円歌師が田中利助であると云う事は唯も確認して居らなかったたまたま田中君の小学校時代の友人安藤文平君が円歌は確か田中利助かと思うと言われたので会場の公会堂へ電話したら確かに昔の「トーフ」であった。それで吾々クラスメート六、七人で料亭小黒館へ彼を招んで旧交を復活した。彼の普提寺は勝楽寺であったので毎年新潟へ来て居ったが、中学の旧友に会う事は初めてだと言って非常に悦んでおゅた。それ以後は殆んど毎年当地に来るが新潟の味が噌汁甘いと言って宿舎が定って居るに拘はらずよく拙宅に泊られた、弟子が伴をして泊る事もあったがその時は女房役で師匠の身の廻りを甲斐々々しく世話する様は誠に感心させられたものである。

彼は非常な「ドモリ」で今も茶話の時などは非常にどもって居るが高座に上ると少しのよどみなくスラスラと話す。ドモリと新潟弁の是正には随分苦心したと言って居った。ある時東京で急いに熱湯に入り思わず「アチチツ」と叫んだら隣の人が師匠新潟か？と言われたなど例の落語家らしく面白可笑しく話して呉れた。又或時は東京で顔にホクロがあるのを理由に平沢貞通と間違われて交番へ引き込まれたが名刺を出した所お巡りさんは三遊亭円歌（サンアソビ亭マルウタ）とは如何云う職かと聞くので彼は例の茶目気を出してお前さん何時から東京に居るかと聞き返したら十日許り前隣県から応援に来たのだと言った。それで彼はそれでは三遊亭円歌（サンユウティエンカ）を知らないのも無理はないなアと言って自己の有名人である事を披露して釈放されたとの事であった。

彼が死の四、五年前であったがNHKで東京と新潟で二元放送をやった事があつた。東京は円歌、新潟は私と林君お互に話し合っている内に中学校時代の時となって、林君が明治三十八、九年の十四、五才頃と言ったら忽ち円歌から叱られて仕舞ったソンナ言い方をしたら忽ちオレの年令がバレルからと止められた。彼は何時迄も若い様に認められて欲しかったのだ。

彼は永らく腎臓病であったが周囲の止めるのを聞かずに病を押して高座に上り遂に昭和三十九年八月にあの世へ行って了ったのである。

思い出話しは誠に多いが紙面の都合でこれで〆ンを攝く事にする。

昭和四十一年一月四日

三堀謙二君を悼む

三十回　遠藤種雄

新中三十回卒業生で組織している而立会の立役者三堀君が死亡した。昭和四十年十一月二十七日午後八時三分いつもと変りなく療養の手当もすんで静かに語り合う中に、夫人丹記子さんと令嬢に見守られて行年六十四才の一生を終わられた。

恭謙院祖芳良雲居士

二十八日お通夜には、渡辺市長始め阿部、河路、守口、北村、朝倉、渡辺等々沢山の名士が集り、三堀君の霊をなぐさめ、且つは思出の数々を語り合った。

二十九日の告別式は大候に恵まれ読経の合間に弔辞が読まれた。先づ渡辺市長、次いで日報の北村氏、東京から馳せ参じた袴元君が而立会を代表して次のような弔辞を述べた。「到底君が死んだとは思えない。ヤア君元気だね。新潟へ来たから会いに来たよ。本当に懐しい気持で一杯だ、在学中も卒業後も親密に交ったね。善いこともあり悪いこともあった。胸が一杯言葉もない。君は吾々仲間の中で最も話題豊富で台風の目のような存在であった。長い間病床にあり行届いた奥さんの真心こもった看病を受け、お子さん達も皆よくできて夫々立派な社会人となり何等後顧の憂いがないと思う。君は本当に幸福者であった。どうか静かに安らかに眠って下さい。サヨーナラ」

会葬者一同は感涙にむせんだ。三堀君の新中在学時代の思い出を一つ二つ述べる。

(1) 三根校長時代の頃か、三年生時代に自宅に凶悪な強盗が侵入した時その頃既に腕に自信があり、柔道や相撲の心得もあつて、勇敢な彼は率先奮斗、ドロボーを取りおさえた。それで当時の県知事から金一封の表彰を受けた。

(2) 彼は「スカンク」という二ツクネームの持主であった。それはスカンクと言う動物が頗るくさい屁をひって他の動物をヘキエキさせることから由来している。三堀君の腸がどういう工合の仕掛になっているのか盛んに「オナラ」を鳴らしては手づかみにして、誰れと言わずフリかける習性があったようだ、よく袴元氏とも競争し合ったようである。彼は性淡白でヒョウキン者であり誰れからも憎まれない人柄で又腕力家で同輩の及ぶ所でないのでドット微苦笑して終ってしもうのであった。従って彼に「スカンク」と言うニックネームをつけた次第である。

(3) こういうユーモアに富み、珍らしいほどの話題の持主が、卒業して新潟師範学校に入学、小学校の先生となった。私共はどうやって子供を教えるのかと、大いに危惧の念を抱く者がなきにしもあらずだつた。ところが彼の教えを受けた者皆彼を慈父の如く慕い尊敬し、よく教えを守り立派に成長していることを聞くにつけ意外な感に打たれるのである。そして吾々は口を極めて、センサイな感情を持って周到な心構えで教育に熱意を傾けた彼に称讃を送り、彼の偉大な人徳の致すところと敬服愛慕に堪えないところであります。

最後に奥さんが何か言い残すことがありませんかと聞かれた時、「兄弟姉妹仲良く相和して長幼には序あり、あと言うことなし」と答えられたそうである。

仏間の柱に

「兄弟姉妹仲良く即和長幼序有。後語無」と清書して貼ってある

瞑目合掌

源川栄二君のことなど

33回　斎藤希式

源川栄ちゃんは、母校野球部出身者の中では、野球人として最も高名を馳せた一人である。

彼が五年で投手だった大正十三年の野球部は、当時の強剛松本商業に一点差で敗け、現在になってみれば千載一遇のチャンスだった甲子園行きを逸してしまったが、野球部史上最強のチームであった。

全国制覇の野望を燃やしていた松商が、最大の難敵としていかに彼の下手投げを警戒したかは、彼等のスパイが、予選直前の我々の練習を、グラウンドわきの松林から連日メモを取っていたことからも、はっきり察知されたものだった。

当時下手投げの投手というものが珍らしかった上に、彼がそれほどマークされた理由の一つとしては、普通の下手投げとちがって、少年の頃の怪我で右の骨が突き出して真直ぐに曲げられなくなり、いいにも悪いにもそれ以外の投げ方が出来ないので、普通の場合と全くちがった球道となるので、打者はすっかりまごついてしもうという特異の球威を縦横に駆使した点にあった。

母校卒業後早稲田大学へ進んだが、その球質はいよいよ磨きがかかり三年目にはワセダのエースとして六大学リーグ戦に活躍したが球界の大御所であった故飛田穂ん氏が、いみじくも彼を評して『サブマリン投手』と名づけたのは、彼の出現に眼を見張った当時のファンの気持をピタリと言い当てた名表現であった。

事情があって中途で野球部を退部した彼は、卒業すると民間会社へ入り野球から一時遠ざかっていたが、終戦後長い間害していた健康を恢復すると巨人軍のコーチをしていた谷口氏に勧められてスカウトとなり、現在プロレス界に君臨している馬場を本県の三条高工から巨人軍へ引張って大いに話題を賑わしたりした。

巨人軍を退団後、二年間ほど青山学院大学の監督となり、チームを連れて新潟へ試合に来たりしたが、間もなく明治神宮の球場長となり死ぬまで学生野球の発展に尽した文字通り野球人の一生だった。

母校時代の栄ちゃんは、内面的には多少気が弱く――特に試合のマウンドに上がった時、不思議に思うくらいその弱気が出てきて、大事な勝負を何度か落したりしたが――日常に於ては、茶目ッ気で明るい人間性の溢れた愛すべき男だった。

栄ちゃんの茶目ッ気を伝える逸話は数多くあるが、今でも思い出すと愉快になるとって置きの話を一つ。

それは、雪がうんと積もったある朝のことで、たしか臨時試験の始まった時であった。答案を出して二階の廊下へ出ると、大勢が中庭のテニスコートを覗き込んでは奇声を挙げて歓んでいる騒ぎなの

真保一輔先生を偲ぶ

四〇回　松田一郎（職員　生物）

先生は、現在の白根市庄瀬に生まれになり、高等小学校卒業後一時代用教員なされておられたが、向学心やみがたく明治三四年新潟中学校に入学された。

中学校卒業後は、一高、東京帝大と秀才コースを歩まれた。

明治四五年大学を卒業されてからは、副手として研究室に残られ研究研究に専念された。大正八年旧制新潟高等学校の教授として御着任、以来四十年間、郷党の子弟の育成に心血をそそがれ、又天然記念物調査員として新潟県内の文化財の発見と顕彰につとめられた。

その間「虫エイ」の研究をはじめとする多数の専門的研究論文を発表なされた。

昭和三四年、停年御退職後は引続き名誉教授として大学と関係を保たれ、植物の真保先生として県内の生物関係者から敬愛されて来た。

突然、先生の訃報を耳にしたのは、一昨年の盛夏のころであったが、先生は昭和三十九年七月一七日御他界なされたのである。

先生のお庭には、各地の山野か先生が移し植えられた、さまざまな野の草、山の木が季節ごとに素朴な花を着けているとおききしているが、主のない庭は今どうなっているのだろう。

先生の御冥福を御祈り申し上げたい。

――――――

である。急いで駈け寄って見るとなんと広いコート一杯に『男性の象徴』が美事な雪の芸術として渾然と造型されているではないか。それはもうワイセツなどという卑少なものでなくて、まさに偉大さそのものであった。その時日頃謹厳そのものを以て敬愛されているシャモが、教室から出て来て何やらんと静かに静かにと声をかけながらみんなの背後から一目覗き込んだ瞬間、つと顔を反らすなり棒を呑んだように体を真直ぐにして澄ました顔で足早やに行ってしまったではないか。いや悪童どもの嬉しがったことといったら、肩を叩き合って暫し試験の憂さも忘れたものだった。犯人は遂に分からずじまえになり、栄ちゃんは皆と一緒になって凄えなア凄えなアとにやにやしていたが、誰とはなしに彼と斎藤凱ちちゃんの仕事だと腹の中では決めていたらしい。

筆者より一年上級の彼の野球仲間は、藤慎平と田中喜一は戦争で若槻徹と宮沢栄一と高橋東平は病気で、これで全部亡くなってしまった。惜しい男たちばかりで、全く痛恨に堪えない次第である。

昭和三十九年八月二十五日、彼の葬儀には、青木得三大先輩が東大学野球連盟会長として焼香され、在京の袴元先輩のご好意で、青山同窓会本部と野球部の花環が霊前に供せられた。

好漢栄ちゃんよ、安らかに冥り給え。

ああ　故大倉英太郎先生

三四回　岩野裕吉（職員　国語）

もと、新潟高等学校教頭として本校の復興と青山同窓会の発展に貢献された大倉英太郎先生が昨年十月十九日、不帰の客となられました。深く哀悼の意を表したいと思います。

先生は岩船郡西神納村の出身、大正十一年三月村上中学、続いて新潟師範二部卒業、更に漢文学専攻のため広島文理科大学に進まれ卒業後は台湾で教職につかれました。終戦後内地に引き揚げ、長岡中学校諭から昭和二十三年本校に転任され、昭和三十年六月までの八年間、国語担当、教頭として教えて倦まれませんでした。

その間、先生にとってもっとも悲しいできごとは、新潟大学医学部在学中のお嬢さんが列車事故でなくなられたことでしょう。その日先生が忘れられたお弁当をお昼に、にこにことしながら届けに来られてから、四時間後のことでした。先生は深く考えることがあって救いをキリスト教に求められ、敬虔な信者として終始されました。

もう一つは、母校の焼失であります。たまたま生徒を引率して京阪旅行中でありましたので、生徒を説得し、大いそぎで帰校、焼け跡の始末、復興への難事業に没頭されました。

先生はまことに正直で熱情家、曲ったことはいささかも受けつけない方でした。それで一度は先生の一喝をいただかない職員はなかったようです。しかし淡白でしたので、すぐ自分から呵々と笑って自己を反省されました。深い功績が認められ、西新発田高等学校長に破格の栄転、新発田高校長を歴任、停年ご退職されました。

ご遺族は奥さんと、大学生の末子のお嬢さんのお二人、それこそ目に入れても痛くないお嬢さんの成人を楽しみに、悠々自適の生活を営まれることになっていたのに不治の病におかされ、ほんの数日病床に臥されただけで、生げるまま息を引きとられました。享年六十二遺徳を慕う多数の参列者が涙してお送りする中を神の子として昇天されました。珍らしいほどな秋晴れの日でした。

新装なった艇庫

信濃川護岸上にあった本校艇庫は、新潟地震でメチャメチャにこわれてしまった。信濃川護岸復旧工事の支障となるため徹去させられたが復旧後、今までの堤防上に設置できなくなり、一時再建があやぶまれたが、県当局はじめ、北陸地方建設局の厚意により、信濃川河川敷内に再建が認められ、新潟地震以来不便をかこっていた本校漕艇部はようやく新艇庫を得て練習にはげんでいる。

堤防上及び付近には、復旧工事完成以降、（護岸は今までより高くなった）護岸堤防の性質から建築物その他工作物の設置が認められなくなり、代替地をみつけて建築のやむなきに至った。早速、加賀田二四夫氏（現県議、36回卒）をはじめ県河川課、管財当局にも依頼し土地を探してもらったが、附近両岸に適当な代替地はなく、河川敷内に建築できればと国県にこれを強く要望、陳情を重ねた。この間一進一退、迂予曲折があったが、関係当局の暖いご理解のもとにようやく向う二年間の条件付きで認められたもの。

河川内のため基礎工事に思わぬ金を投入することとなったが、苦しい学校予算をやりくりし建築にこぎつけたものである。地震洪水等の警戒水位をこえて建てるため流水を阻害することもない。許可期限は向う二ケ年であるが二年でつぶすのは全くしのびない。北陸地建当局の更にあたたかいご理解を望んでやまない。

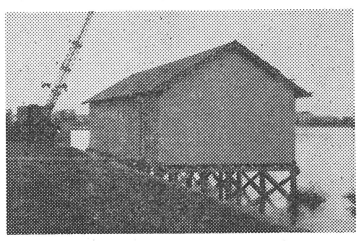
艇庫の概要は次のとおり。

○占用地・信濃川筋河川敷（川岸町一、左岸）

○専用面積・廻一一七・三〇四平方米、艇庫建坪八九・二四平方米

○占用期間・昭和四十二年三月三十一日まで、

○構造



艇庫＝木造平家建八九・二四平方米（九間×三間）

基礎＝経十九・五糎。長さ十米の松丸太二十六本河川敷へ打込む。

桟橋＝巾三・九米。長さ五・二米の木造

○建築費・艇庫、桟橋の基礎工事＝四六四、二〇〇円、艇庫、桟橋工事＝六一七、八〇〇円

あゆみ板、階段工事＝一八、〇〇〇円、計一、一〇〇、〇〇〇円

○施　工・加賀田組

○竣　工・昭和四十年五月三日

（山崎記）

東京から

旧職員　鈴木　要

新潟中学校（現新潟高等学校）は開設されてから早くも七十余年を経過し、毎年に多数の俊秀を世に送り、今では社会のあらゆる方面で我校の卒業生は枢要の地位を占め、社会の発展に功献している状態を見ると実に壮観というべきです。

地元新潟市に於ても同窓会の活動は益々旺んで天下の名門校としての貫録が十分にあると存じます

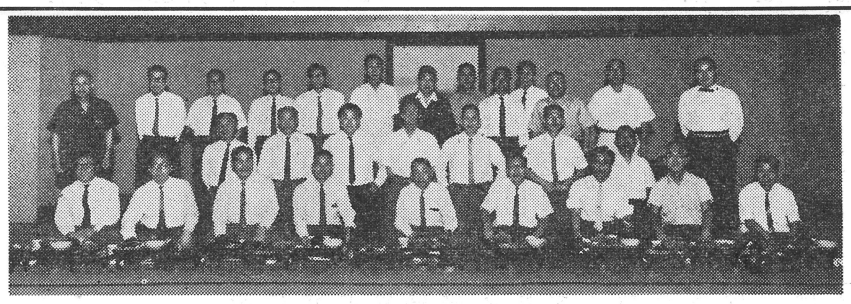
また此の度青山同窓会報を発刊された事はお互の情報交換や母校愛の精神涵養にも大いに役立つことと喜び申上げます。

なおこの際一歩をすすめて青山同窓会東京支部を確立していただき度いと思います。東京には沢山の極めて優秀な卒業生が色々の方面に活動して居ります。これ等の人々が団結をして居ったなら後輩の指導や郷土の開発等あらゆる面に役立つものと存じます。大先輩の知名人は誰もが知って居りますが未だ頭角を現さない中堅クラスまたは少壮新進の実力者が沢山東京に活動して居ります。言うまでもなく東京は我が国政治文化経済の中心でありここに強力な青山同窓会支部をつくり、中央と郷土新潟との連結を密にすることは後輩育成の為にもまた郷土発展の為にも大いに意義あることと思います

学校御当局及び同窓会諸賢に右の実現をお願いします。

三六会総会

去る八月七日第三十六回生（昭和四年卒）は割ぼう万代に於て君副知事の昇任祝賀をかね総会を開く。燕、加茂、村松、新津、吉田白根など近郊からもはせ参じ総勢二十九名、懐旧淡に花を咲かせ、思い出の校歌、応援歌を高唱し、盛会裡に次期会合を約して散会した。（写真の前列中央君氏）



「あの頃」

旧職員　田中松太郎

NHKのテレビを見ていたら会純道君（昭五卒）がでてきて、朝のラッシュをさけて一時間早く出勤する話をした。生活の知恵という番組だった。会君とは三四人の有志と放課後教室で英作をやったことがある。そのおもかげがホウフツして来て、とてもなつかしかった。

万代橋が木橋の頃だ。四月十日に東京から赴任して、裁判所裏の旅館に入ったが、翌朝目をさますと、霰の音がする。これには驚いて逃げ出そうかと三日荷物をとかなかった。それでもやがて旭町の下宿屋へおちつき、恰度築港博が白山にあって、その演芸場に、本場の佐渡おけさがきていたので毎晩見に行ったものだ。

学校のかえり、すぐ下宿へ帰っても仕方がないので、よく古町へ出て行ったが、途、二三人の生徒と連れ立って、話をしながら歩いたが、今考えてみると、主任のなかった時だとしても、随分早く学校をぬけ出したものだと思う。小山久一君（昭三卒）もその生徒の中にいた。小甚には、私の大学の同窓で富士銀行にいたOや、中学の同窓で主計中将まで行ったK（今は会計士）が泊まるので、よく飲みに出かけて行ったがかけちがって小山君にはあわずじまいだったのは残念だった。

私は三年前、新大の看護婦学校の講師兼舎監をさいごに退職、今年は古稀の年をむかえることになったが、この学校で湯浅順子さん（昭三一卒）を教えた。

私は今は三条（市興野）にいるが、家内が交通事故で足を折ったので、草野さん（昭一一卒）によくしてもらっている。寺田宏君（昭九卒）が、こないだまで院長をしていた三条綜合病院には四五人は卒業生がいるので会報第一号は回らんしてもらおうとおいて来た。小林正人君（昭七卒）もとこかの校医をしている。お子さんが今年、うちの一男と、二人とも入らなかったが新大歯学部へ行った。

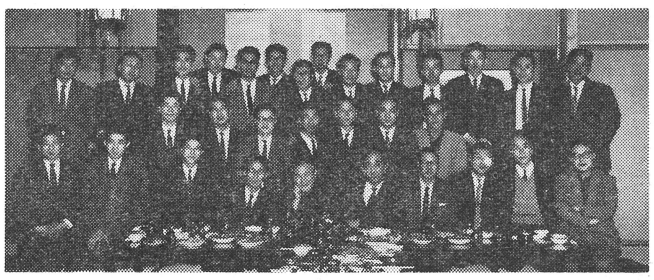
第六〇回記

旧臘十二月十一日夜、第六〇回生の忘年会が行われた。恩師沢山、斎川、石本、大橋禎先生の臨席をいただき大変に盛会であった。

我々の六年間は青陵の校舎に学び青春の夢を育んだ印象強烈な時代で、何年経ってもその思い出は新鮮で忘れ難い、当夜は往時にかへり又お互の発展を祈って乾盃した。

年を追う毎に同窓の集りは楽しく、又諸先生のビンの白さが増すようだ。

（小林智朗）



若槻繁君、小林君と同じ年度卒だが、にんじんクラブをやっているのが、テレビでわかって、なつかしかったことを附け加えておこう。

48期忘年懇親会所感

幹事　大塚進弥

新中を出てから24年目を迎える吾が48期会（42、43才）の忘年懇親会がみぞれ降る十一月二十日（土）夜6時より割烹大丸に於て藤田武田両先生をお迎えして開催され、知事選の直後だけに業務の都合上か会議出張中の会員が意外にあり忘年懇親会は毎年十一月の第三土曜日に開かれることを知りながらも、出席出来ないと残念がる級友も多かった。然し当日は22名の出席者が両先生をお囲みして大いに気勢を上げた、藤田先生の「新潟中学は県下第一等の学校であり、良い学校は先生も環境も良く伝統も立派であるが、更にそれ以上に卒業した学友が皆各方面に立派な人材となってをるところに意義がある」とのお話しは全員深く共感を憶えた。又武田先生の毎々変らぬユーモラスな態度と、その童顔は、頭のアメタ級友と先生を「どちらが先生ですか」と仲居さんに問違はれる一幕もあり改めて坊チャンの若さと美貌を、うらやましがられておられた。乾盃後出席者全員三分間スピーチに移り家族や職業の近況新中時代の思い出を語るスピーチは時の経過を忘れ、新中の腕白時代に返り、爆笑又爆笑愉快な懇親会であった。又談論風発の席上小川清常君より緊急動議出て「来年は25周年を迎えるのでこれを記念して物故せる級友を偲び御冥福を祈り、併せて懇親会を夫人同伴として大いに48期会の親睦を深めよう」との提案を全員諒承し欠席会員にも言伝することに決定した九時半過ぎ母校の校歌応援歌を大橋明自君のタクトで高らかに歌いその風概は24年前と少しも変るところがなかった

母校の発展、両先生、同期生のご多幸を祈って万才三唱の音頭も景気よく散会となった。吾が48期会の出席は勿論、毎年一月下旬開催される同窓会の新年会、七月一日挙行の青山同窓会にも努めて出席することが、同期生は勿論先輩後輩との繋りを一層強化してゆくものと思はれるので、今後も努めて同窓会にも出席される様勧誘した次第である

近藤は新津から、金沢、三浦の二名は上野駅から……。従って前後して同時刻（12時頃）湯沢駅で53年振りで再会、自動車を連ねて羽黒荘へ、そして旅装もとかずに室で旧情を温めること一時間半、それから入浴して全国高校野球優勝戦を見て、さて第二回目の審議？午後六時まで現在、過去についての話がつきません。思い切って午後六時半から夕食、新中の思い出を肴にして飲むこと飲むこと、高橋は入歯をこわして歯なし（話）はこれで終り……。いつの間にか床に入りにけり。

生存者27名通知を出した者23名受返事20名永年にわたる件案でありましたので少くとも10名の出席者を予定しておりましたが集るもの七名

主催者の四名（小島、高橋、長谷川、畑）は新潟から乗車。五泉の

第20回卒業生の集り

8月22日湯沢温泉羽黒荘に於て開催

円歌師匠と語る（思い出）

三〇回　湊元克己

故円歌師匠

筆者は涙ぐましい。師匠の話は、笑の中に大きな教訓と理論があるので私の会社の雑誌にものせて貰った。以下これを抜粋転記させていただく。

私は第一六回卒業優等生田中利助です。その頃の同窓生としては田中耕太郎、旧校長多田綱宏の息子の多田中将等々、多士才々でした。その中にあって、私は世の中に笑いというものを拡めるために敢然として身を立てたわけです。

当時の学校は殺伐でしたな。何しろ日清、日露戦争の勝利です。なかでも明治三十八年の中・商・師の三校ボートレースの騒ぎは有名でした。判定でもめて商業と大喧嘩がはじまった。この事件で多田校長は辞職し、代議士あがりの長沢先生が跡をつぎましたが、この事件の際、私も雷同組に属し商業学校を襲って停学を命ぜられました。

その代り、軟派は排撃されましたし恋愛事件などといったものはなかった時代です。

近くの女学校の塀を覗いただけで鉄拳のせいさいを受けたものです。長沢校長が文部省から受けた指示〝新潟中なる学校は生徒が乱暴で、箸にも棒にもかからんところだ。うんと締めるように〟これだけでも当時の蛮勇さがおわかりのことと思います。

現在の日本では英語とか、その他の国際語を学習する必要があると思いますが、やはり国語の教育が一番大切じゃないでしょうか。国語といっても読むこと、書くこと、話すこと、みな大事です。日本の国語の話し方の教育はあまり進んでいないようですが、徳川夢声や私などが国語の先生になれば話し方教育は進歩しますよ。

最近、各大学にも落語研究会などができたそうで結構なことですな。それは選挙にも、商売にも、サラリーマンにも、出世の道になるでしょう。

全学連の向うを張って
全落連といきましょうか。

私はラジオやテレビで御存知でしょうが、中学時代にはちょっとしたことでも吃っていました。なかでも夕行、カ行ハ行、それが一番吃りには不得手の発音です。そのうちでも夕行は御承知の通り、舌を上顎につけて離す瞬間の発音ですから、なかなか難かしいのです。先生から読めと指名されると吃って読めなくなる。読めないのではなくて、発音する器械が動かなくなる。その時、先生から救ってもらうとあとはスラスラと出てくるわけです。

吃りが落語家になったのは意外だと思うでしょうが、人間は何事もやろうと思えばやれるものです。私が一席話をするうちには今でも吃りますが、それを見せないようにする苦心が必要です。自分はこれだけはできると考え、自信をもっていれば、何事も恐れないし、安心を伴なうことによって吃らないのだと思います。今の子どもは、映画・テレビなどでいろんなことを知っていて、先生がたも却って教育に苦労があると存じますが、私としては七重のひざを八重に折って、先生方に心より子どもの教育をよろしくお願いしたいと思います。愚言多謝。

附記

源川栄二君を悼む

この年、円歌師匠を喪った日の三日前の八月二十二日、これも東京青山同窓会の名物男、青山が生んだサブマリン名投手早大投手と番叟の神宮のマウンドで人気をあつめた源川栄二君急死の悲報をうけて愕然とした。

前年これも東京青山会の名物男師尾源蔵先輩を失ったかなしみの傷に重ねてのダブルパンチをうけた。いづれも同窓会として弔訪贈花した。

三八回

八月七日午後六時より越路会館に於て開催、出席者約三十名。このたびの三十五回例会は清水（行形）益郎君の昭和石油新潟製油所長就任を祝し、等々力英男君のヨーロッパ視察出発を激励し、お互いの近況など語り合って、夏の一夜を大いに気勢をあげました。

（宮尾）

翌朝は思い思いの汽車を選んで家族と孫への土産を持って帰途につきました。

申し合せとして又国境の温泉であいましょう。

（小鳴）

第四十七回生

去る十一月十九日第四十七回生同年会が行われた。恩師金沢、歌川、藤田、阿部、武田、渡部先生をむかえ、きわめて盛会であった。

われわれは、毎年、授業に関係された先生を全部招いて、同年会を行うことにしている。旧職員相互の交誼をあたためる機会ともなるということで、先生方からも喜ばれるようだ。

（中川保　記）

営業品目

徽章・バツジ・メダル・バツクル・ネクタイ止メ
優勝旗・団　旗・校　旗・優勝カツプ・其の他

万国徽章工業株式会社

代表取締役　小林　智明　（60回卒業）
本　社　新潟市東中通1ノ214
電　話　(23) 1907番
工　場　新潟市紫竹1号通1305番地
電　話　(45) 4295・4299番

[redacted]

会員の移動

（昭和四〇年七月一日以後事務局に連絡のあつたもの　空欄はもとのまま）

卒業回数	氏名	職業・勤務先	住所
[redacted]			

物故会員

謹んでお悔み申上げます

卒業回数	氏名	死亡年月日
旧職員	大倉英太郎	四〇一一〇一九
〃	土田桂次郎	四〇一〇三〇
三〇	三堀謙二	四〇一一二七
四六	鬼島勝夫	

第三学年大学進学志望（四一、一、一三調）

学校名	学部	人数
北海道大学	理	八
東北大学	法	四
〃	経	二
〃	文	一
〃	工	三
〃	理	三
〃	医	一
千葉大学	薬	一
東京大学	文一	六
〃	文二	一
〃	文三	二
〃	理一	一三
東京教育大	文	二八
〃	理	二
〃	農	一
一橋大学	法	一
〃	経	八
〃	社	一
〃	商	六
東京工業大	一	一一
東京芸術大	絵	二
〃	音	二
〃	経	二
新潟大学	人文(社)	二八
〃	人文(文)	一五
〃	医	三一
〃	歯	七
〃	理	二一
〃	工	四六
〃	農	九
〃	教	一五
金沢大学	文	六
名古屋大学	法	四
京都大学	経	三
〃	理工	七
大阪大学	文系	二
〃	法	三
神戸大学	法	一
埼玉大学	文	二
東京医・歯大	薬	四
東京商船大		四
電気通信大		三
東京外語大	音	一
東京学芸大		六
信州大学		一
富山大学	薬	三
横浜国立大		六
滋賀大学		一

学校名	学部	人数
大阪外語大		一五
東京都立大		一
岐阜薬大		三
大阪府立大		一
三重大学		二
新大商業短期		二
神戸商船大		一
横浜市立大		二
京都工繊大		一
慶応大学	経	五
〃	法	一〇
〃	商	六
〃	文	三
〃	工	三
早稲田大学	政・経	一二
〃	法	一一
〃	商	一五
〃	文	七
〃	教	二
〃	理工	一六
中央大学	法	五
一橋大学	経	一
明治大学	政	二
〃	工	一
日本大学	文	一
〃	理	三
〃	芸	一
〃	法	一
法政大学		一
青山学院大		二一
上智大学		二
津田塾大学		六
東京女子大		四
日本女子大		二
駒沢大学		一
東京経済大		一
日本医科大		一
星薬科大学		一
同志者大学		六
大阪歯科大		一
神戸女子薬科		一
東京慈恵医大		一
I・C・U		二
拓植大学		一
武蔵野美大		一
武蔵野音大		一
国立音楽大		二
奈良女子大		一
奈良県立医大		二

ご卒業・ご入学・PTAに
おしゃれの
訪問着・小紋・コート展
本町五 1 大市呉服店
大塚進弥 48回卒

日立製作所特約店
株式会社 石井電光社
社長 石井四一郎 34回卒
専務 石井壮一 61回卒
新潟市古町通8番町 電話(代)㉓6411番

制御品 照明製品 変圧器 溶接機 配電盤 遮断器 保安器具 モートル 電動工具
圧縮機 送風機 融雪装置 電線 ケーブル 化学製品 建設機械 産業機械 計測機 レントゲン